

て就職できずに苦勞をした。

現地では種々なことがあった、山から木を切ってきて、自分たちで兵舎を建てた。暖房など勿論なく、外套を着たまま眠る毎日であった。食物はパン一切、汁は塩スープ一ぱい、これでは栄養失調にならないのがおかしいくらいであった。モロコという魚をとって食べた。食べられると思うようなものは、何でも食べた。生の馬鈴薯のにかかったことを今でも時に思い出す。病気で入院しても、薬などなく、ただ寝ているだけ。これでは治る病氣も、治るはずもない。沢山の戦友が死んでいった。何とかこれらの人々の供養をせねばいけないと思ひながら、それが果たせず胸がいたむ思いである。

シベリア抑留記

京都府 吉田 静

職 業 農 業

生年月日 大正十一年九月二十二日生

現住所 京都府船井郡丹波町字院内小字市庭一四番

地

元陸軍一等兵

満州国吉林省敦化県青溝子開拓団桃源郷にて昭和二十年五月一日、召集をうけ、満州国チチハルの部隊へ入隊する。当時独身。

昭和二十年七月十日、満州国の首都新京特別市守備水島部隊へ転属する。それより八月十五日の終戦まで市内主要道路にソ連戦車を防ぐ壕掘りとタコツボ掘りを行う。作戦としては侵攻してくる敵戦車が壕に遭遇して立ち往生するところをタコツボに隠れている兵が爆雷を抱えてキャタピラの前へとび込み爆破するとい

うのである。ところがそれまでに戦争は終わった。

八月十五日終戦の詔勅を部隊本部のラジオで聞いた。雑音のため意味がよく分らなかったが、小隊長の説明で日本がアメリカ連合軍に降伏した。戦争は終わったというのだ。我々兵隊はどうなるんだろう、これが第一の心配だ。内地の父母たちはどうなるのだろうか、これが第二の心配を兵同士で囁き合った。

武装解除―九月中旬、ソ連兵の姿は見えなかったが、兵器を一カ所へ集結した。

入ソ―九月下旬 北満の黒河から黒龍江を渡りソ連のブラゴエシチェンスクに入る。黒河へ来るまでは我々はウラジオストク経由で日本へ返されるのだという噂が流れていたが、当分はソ連内で強制労働させられるらしいという。抑留地はテルマ収容所で日本兵三百人余りが入れられた。

作業は森林伐採ですぐ始められた。現場に作業小屋があつて五十名余り宿泊する。丸太造りの半地下式で零下四〇度―五〇度の冬の寒気は心臓も凍りつきそうだ。食糧は少量で空腹をかかえての伐採はきびしい。

雪が降った。一晚で五十センチ余り積もったが、労務は強行された。雪で足もとが悪く能率が上がらない。そんな毎日であつた。倒れて来る大木の枝が当たつて大怪我をする者もあつた。直径一メートル余の巨木を倒し、枝を外し、搬出する寸法に挽く、二人挽きの大鋸を使うのが栄養失調になりかかっている我々には地獄の苦しみというべきものであつた。

二年目は製材所の材木運搬や道路造りの土木労役であつた。冬の間は雪橇で運搬するが、雪が溶けるとトラック運搬となるので道の悪いところを修理したり丸太を敷いたりするが、車輪がめり込んだりすることもあつた。

夜の食事は朝食より少し濃い程度の雑穀の粥と野菜が少々入ったスープ（塩汁）で腹がふくれるというには至らない。夜の自由時間になると故郷の話や食い物の話になる。

昭和二十二年四月中旬、ナホトカに集結する。共產思想教育を二週間余り受ける。

五月三日、日の丸の旗をはためかせて引揚船が入っ

てきた。日本だ！ 日本へ帰れる。思わず涙がこぼれた。

『スターリン大元帥閣下萬歳！』命ぜられて大声で三唱した。

五月七日、舞鶴港上陸。日本の土を踏んだ実感を感じみ味わった。生きて帰った。

五月十日、本籍地の船井郡殿田町の我が家に無事帰着することができた。

シベリアへ抑留

和歌山県 面家 一博

昭和二十年四月一日松江市に集合、博多港より釜山港まで輸送船で、それから鉄道でハルビンへ、その満州第八三七二部隊の高橋大佐の下に入隊する。軍事訓練も十分に受けられないまま、ソ連軍の侵攻で新京まで南下し終戦を迎えた。

終戦になるや、八路軍の暴動に対し銃を持って鎮圧

に行く者もあったが、私は参加せずにいた。そのうちにソ連軍が侵入してきて小学校の校庭で武装解除になった。十月中旬ころに貨車に詰め込まれて北へ北へと進む。武装解除を受けた当時から二カ月間は、どのようなことになるかは分からないまま待機していたときに、大隊長は「我々は今はここにいるが、やがては祖国に無事帰れるから流言飛語に惑わされず静かに時を待つように」と度々訓示していたが、一人また一人と逃亡する者があった。その彼らに「先見の明」があったのかどうか、隊にいたら、やがては抑留の憂き目を見るであろうと言っていたが、我々のように満語も話せず地図に不案内な、内地より直接送られてきて間もない者には成り行きに任せるよりなかった。その我が小隊は二〇一名であった。

十数日かかって十一月の初めにバイカル湖南岸の「ウランウデ」に到着し下車した。

収容所はあまり大きくない棟二棟で、狭いながらもそこで起居することになった。

二日目から宿舍を建て増しする工事に掛かる。山に